

1. 概要

【主担当部局】信州大学教育学部

【本事業関連URL】

信州大学附属長野3校のインクルーシブな学校運営モデル事業の特設HP

※ 今後特設HPを開設予定です

信州大学教育学部 <https://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/education/>

附属長野小学校 <https://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/education/naga-sho/>

附属長野中学校 <https://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/education/naga-chu/>

附属長野特別支援学校 <https://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/education/naga-tokushi/>

本事業の目的

【当該地域におけるこれまでの課題】

・信州大学教育学部附属長野3校（以下、3校）は、小学校、中学校、知的障害特別支援学校が併置されている。3校は、長野市や須坂市、小布施町等の近隣地域から大半の児童生徒が通っている。また、教員は県内小中特別支援学校からの交流人事で各校に勤務している。併置されている3校ではあるが、時間割や教育課程の違いから学校間の日常的な交流は限定的であり、それぞれの学校でなされている教育について、情報共有や連携のさらなる強化が求められ、相互理解を深める余地が残された状況にある。

【本事業を通して達成を目指す目標】

- ・通常の学級の中で知的障害のある児童生徒とない児童生徒が互恵的に学ぶための条件を明らかにすること（各教科、領域等について）
- ・汎用性のあるインクルーシブな学校運営モデルを提案すること

学校運営連携校

特別支援学校

信州大学教育学部附属特別支援学校
（児童生徒数）小：19名、中：18名、高等部：23名
（障害種）知的障害

小・中・高等学校

信州大学教育学部附属長野小学校（児童数）432名
信州大学教育学部附属長野中学校（生徒数）604名

カリキュラム・マネージャー

【配置人数】 3（A、B、C）

【主な経歴】 学級担任、実務家教員（A、B、C） 教務主任・主幹教諭（A、B）、全校研究主任（B、C）

【本事業における役割】

- ・A 「主に附属長野中」 学校間の教育課程連携の調整、インクルーシブな授業計画～実施のサポート、視察実施と報告
- ・B 「主に附属長野小」 学校間の教育課程連携の調整、インクルーシブな授業計画～実施のサポート、視察実施と報告
- ・C 「主に附属特別支援学校」 研究代表者。学校間の教育課程連携の調整、インクルーシブな授業計画～実施のサポート、インクルーシブアシスタントスタッフの勤務に関わるサポート、研修企画、実施、研究発表、論文執筆

連携協議会

【構成人数】 8名

【開催回数】 2回

【外部専門家】 現在依頼中（特総研研究員、長野県教育委員会、信州大学教育学部長等）

【連携協議会において検討・議論した主な内容】

特別支援教育の現状を共有し、様々な児童生徒がいることを前提としたインクルーシブな授業を3校で力を合わせていく必要性とその可能性を議論した。3校で目標を共有して深める取り組みの重要性と、教師が取り組みやすい方法を模索し、円滑に進めることを目指す方針を確認した。

2. 交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討

交流及び共同学習の発展の方向性・ねらい

- ①3年計画で様々な教科や単元の中で知的障害のある児童生徒と一緒に学べる授業づくりやそのモデル作りをすることを旨とする。本年度の実践は、来年度により活発に交流を行うための学校間の関係性を作ったり、共同学習を行う上での課題や可能性を明らかにしたりするための土台作りに位置づける。
- ②その上で、これまで大切に行ってきた交流及び共同学習の授業について、内容的・活動的により充実した授業づくりを行う。その中で、学校種の異なる教員がどのように連携を図るとよいか、どのような授業が実施できるか、各校の教育課程上のねらいと評価を学習指導要領に即してどのように明確化するかなどについて明らかにし、今後の授業づくりに生かす(R6年4月～R7年3月実施)。
- ③図画工作・美術、体育・保健体育といった小中学校の教科の授業に特別支援学校の児童生徒が参加する授業づくりを行い、(i)連携の仕方や(ii)知的障害のある児童生徒が参加することで、これまでの授業づくりと比較して、どのような点が変わったかを明らかにする(R7年1～3月実施)。
- ④効果的な交流及び共同学習を目指すだけでなく、本研究を通して、通常の学級において多様な児童生徒が包接される学級づくりの在り方についても探究する。

実施内容 ※ここでは主に上記②について述べる

実践① 単元名「小坂さんの土」を使って記念のタイルを作ろう		実践② 年間を通した「交流及び共同学習」	
対象学年:	特別支援学校小学部にじ組(5,6年)と長野小学校3年1組	対象学年:	特別支援学校中学部(1～3年生)と長野中学校2年C組
回数・教科:	計9回(3年1組は10回) 【小学校】特別活動1回、総合6回、図工3回 【特支】生活4回、生活単元学習2回、図工3回	回数・教科:	計8回(【中学校】特別活動、【特支】国語、数学、理科、社会、保健体育、音楽、美術、職業家庭) ※ 中学部は主に各教科等を合わせた指導(生活単元学習)で実施。
主な内容:	<p>【小】学級活動(1回) 【特】生活(1回) 特別支援学校と一緒に運動をしたり、小坂さんの土をこねたりして遊ぶ。</p> <p>【小】【特】図工(3回) グループに分かれ、既成のタイルを自分たちの好きなように並べてタイルアートに取り組む。「小坂さんの土」をこねたり、丸や三角にする。</p> <p>【小】総合(3回) 【特】生活単元学習(2回) 生活(1回) 小学部生活単元学習の遊び場で3の1とにじ組の児童と一緒に遊ぶ。育てたさつまいもを持ち寄り、特別支援学校のピザ窯を使って焼き芋会をする。</p> <p>【小】総合(1回) 特別支援学校高等部陶芸班の生徒や教師と陶芸室付近で施釉体験を行う。</p> <p>【小】総合(2回) 【特】生活(2回) 校外学習に出掛け、陶芸家の方と「小坂さんの土」を粘土にして、形を作る。素焼きした粘土(タイル)に好きな釉薬をつける。</p>	<p>主な内容:</p> <p>4、5、7月(3回): 中学部の学級毎のグループで、ダンスやしりとり等のレクリエーションに取り組んだり、2Cの生徒が考えただるまさんが転んだやスプーンリレー、的当て等の活動に共に取り組んだりする。</p> <p>6月(1回): 中学部生活単元学習「スーパーABC科学館で実験しよう」の単元のまとめに2Cの生徒を招待。中学部生徒が制作した実験道具(風力カー、ゴム鉄砲、空気砲など)を使って、共に実験に取り組む。</p> <p>10月(3回): 中学部生活単元学習「みんなで楽しもう!あさひのスマイルゴルフ大会」において、用いる道具を共に制作する、制作した道具を使ってゴルフ大会を楽しむ。</p> <p>11月(1回): 中学部が行っている太鼓を一緒にいき、好きな曲や勇駒の演奏をする。</p>	



※ 素焼きと本焼きは陶芸家の方が実施。完成したタイルで何を作るかは児童たちが決める



2. 交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討

交流及び共同学習の成果

実践①（小学校3年1組と小学部にじ組）

図画工作のタイルアートの授業において、様々な色や形のタイルを板に敷き詰める際、にじ組児童がタイルを指で弾いて飛ばして置く姿を見た長野小児童が、「おもしろいやり方だね。私もやってみよう」といってそのやり方を取り入れた。さらに、「もう少し遠くから飛ばして置いてみよう」「僕は斜めからやってみる」などといったやり方にアレンジを加えながら取り組む姿があった。

このように長野小児童がにじ組児童の取り組み方を見て、取り入れたり、アレンジを加えたりする姿は別の授業でも見られた。これらの姿から、**多様な集団で学ぶことの意義として、児童が取り組み方の幅を広げていく可能性があることが示唆された。**

実践②（中学校2年C組と中学部）

ゴルフ大会に向けての共同制作では次の姿が見られた。(i) 中学部Aさんはボールが上に飛ぶようクラブの先をどうすればよいか問いをもっていた。中学生Bさんは、角度をつけるとよいことを提案した。その後AさんとBさんは角度に着目し、分度器でクラブの角度を測り、どの角度で付けるとよさそうか試行を繰り返した。(ii) 中学部Cさんは休憩で座る椅子を制作し、ちょうどよい大きさの背もたれを付けたい願いをもっていた。中学生DさんとEさんは学級の椅子の座面と背もたれの比率を参考に図に書いたり、計算したりして大きさを導き出した。Cさんはその寸法で木材を測って切り出し、椅子を完成させた。

このように長野中生徒が教科等で学んだことを目の前の課題に応用して活用したり、中学部生徒が実際の場面で必要な教科等の内容を学んだりする姿は別の授業でも見られた。これらの姿から、**交流及び共同学習の意義として、生徒の教科等の学びの広がりや深まりにつながる可能性が示唆された。**

実践①②の姿から、各授業における教科等のねらいはもちろん、想定を越える児童生徒の関わり合いや育ちの姿があらわれた。さらに、教員も協働した授業づくりを通して、日頃からどのような学習や活動なら成立しそうか考えたり、他の学校の教員の取り組みに一層関心をもったりするようになるという変化が生まれた。



制作したタイルアートの一例



～にじ組の遊び場で一緒に遊ぶ～



指導内容・指導方法の工夫

POINT!!

各校の日常生活や授業の充実が基盤

実践①（小学校3年1組と小学部にじ組）

- ・ 題材の設定にあたり、3年1組の中核活動とにじ組児童の興味・関心が重なり合う部分を模索した。
- ・ 活動への見通しや内容の具体的理解に向け、共通の「もの（タイル等）」を介す活動を設定した。

実践②（中学校2年C組と中学部）

- ・ 主に関わる生徒が分かりやすいようにペアを組み、継続的に関わる場面を設けた。活動サイズが大きくなりすぎないように、中学部の学級毎（20人程度）やペア同士で活動する場面を多く設けた。
- ・ 生徒同士の関わり合いの促進に向け、教師は過度な仲介はせず、活動を共に行き、生徒の様子を見て、必要に応じて仲介した。

3. 現行の教員配置にこだわらない専門性を高めた授業実施のための体制構築の在り方

教員や専門スタッフの配置等の工夫

- ・交流及び共同学習を行う両校の学級の教員等によるチーム・ティーチングを以下のように実施した。
授業構想段階: 各学級の児童生徒の様子や興味・関心、願いを踏まえ、どのような活動や工夫があれば学習が成立しそうかアイデアを出し合った。
授業段階: 中心となって進める教員、個々をサポートする教員（誰がどの児童生徒やグループに関わるか）という役割を確認し、連携して授業を進めた。
振り返り段階: 実施した授業における児童生徒の姿から、成果と課題を確認し、次の授業のねらいや活動、手立てを立案した。
- ・教員の過度な負担軽減のため、カリキュラム・マネージャーがミーティングの調整を行い、教材研究や教材準備をともに行った。
- ・インクルーシブアシスタントスタッフが予め両学級の支援等に入り、児童生徒との関係を築いたことで、授業場面において児童生徒をつなぐ仲介役として機能した。
成果→小中学校、特別支援学校の教員がアイデアを出し合う、合意形成を図る、役割に責任をもつなどしながら、協働して授業づくりを行うチームとしての土壌を築くことにつながった。

学校運営連携校間の一体的で専門性を生かした指導体制の構築

- ・中学部教員が、中学校2Cで事前授業を行った。授業では、中学部生徒がゴルフ大会に向けて必要なものを制作していることを伝えたり、実際に制作しているゴルフクラブや材料・道具を示して、ゴルフや制作の体験をしたりした。
成果→2C生徒が中学部生徒の取り組みを知り、ペアの生徒とゴルフや必要なものを制作したいという意欲や必要感の高まりにつながった。
- ・「美術（交流及び共同学習）」の実施に向けたミーティングの実施。中学校美術科教員（美術の専門性）と中学部教員（生徒理解や手立て構築の専門性）がそれぞれの専門性を活かし、意見交換を重ねながら授業づくりを進めている。
成果→多様な子どもを前提として構想した結果、生徒たちがイメージを想起し、さまざまな表現がうまれるきっかけとなるように、材料の量や形、種類を大幅に増やすといった新たな工夫が生まれた（授業は今後実施）。

各学校運営連携校における校内体制の構築

- ・各校の管理職とカリキュラム・マネージャーの連携のもと、インクルーシブな学校運営事業に関わる資料配布や説明、視察報告や実施状況などの共有、意見交換、実施希望の把握などを行なった。
成果→自分から「交流及び共同学習」の授業実施を希望する教員が増加した。また、授業実施まではいかなくても、今後に向けたアイデアを考え、提案する教員も増加した。

教員研修の実施

- ・3校合同研修会の実施。楠見（信州大学、共同研究者）による講演会「『子ども』のための教育へ；なぜ、インクルーシブ教育か」と3校教員の混在したグループによる意見交換会（感じたこと、今後できそうなことや課題）を実施。
成果→本事業を進める意義、重要なポイントの共有につながった。今度に向けた方向性や配慮点が見えてきた。



4. 課題と展望

令和6年度事業における課題

【交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討】

・ **教育課程上の位置付けの一層の明確化**

今年度は主に特別活動や総合的な学習の時間、図画工作・美術での位置付けを見出した。今後、小中学校の教員は主に教科の専門性を、特別支援学校の教員は児童生徒理解や手立ての充実といった専門性を共に発揮しながらの授業づくりが求められる。

・ **知的障害のある児童生徒とない児童生徒が互恵的に学ぶ条件を一層明らかにすること**

児童生徒が共に関わり合いながら、主体的に活動に取り組む交流及び共同学習の授業づくりが実現した。一方で、その成立条件が不明確な部分が多い。般化に向け、分析を進める必要がある。

【現行の教員配置にこだわらない専門性を高めた授業実施のための体制構築の在り方】

・ **3校の組織的運営に向けて**

今年度は、主にこれまでの教員配置等を生かした形で実践を行なった。来年度以降は、今年度の実践を踏まえ、3校の組織的運営につながる工夫を実施していく必要がある。

・ **教員の業務や負担の増加への一層の配慮**

今年度は初めての取り組みであり、教員の連携面での模索が多かった。結果、ミーティングや教材研究、情報共有、意見交換等に掛ける時間が増えてしまった。円滑に進めた事例を踏まえ、般化していく取り組みが求められる。

令和7年度事業の展望

【交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討】

・ **インクルーシブな視点を取り入れた授業改善**

交流及び共同学習の授業にとどまらず、日常の授業においても、インクルーシブな視点を取り入れた授業を実施し、改善を進める。

・ **対象の広がり**

連携を円滑に進めた事例、共に学ぶことで得られた成果を活かし、教員の負担増に配慮しながら、交流及び共同学習を実施する学級や機会を増やすことを目指す。

【現行の教員配置にこだわらない専門性を高めた授業実施のための体制構築の在り方】

・ **各校教員の強みを一層いかして**

3校の教員のもつ児童生徒理解や教科などの専門性の高さや強みを実感した1年であった。児童生徒にとってはもちろん、教員にとっても互いに学びや意義のある授業づくりになるように努める。